

食感覚を表現する擬音語・擬態語の収集および整理

○早川文代 岩政由布子 畑江敬子 島田淳子

(お茶の水女大)

【目的】人間が感覚で捉えた食べ物の性質は、言葉を媒体として表現される。中でも擬音語・擬態語は、食べるときの音や食べ物の状態を擬した言葉であり、食品の性質と感覚とを強く反映している。本研究は、食品の官能特性および人間の感覚特性を客観化する一つの手がかりを得るために、このような擬音語・擬態語を収集・整理し、使用の有無に関する特徴を明らかにすることを目的とした。

【方法】研究室パネル30人の自由回答形式でのアンケートおよび文献調査により用語を収集した。収集した用語を、専門パネル5人の討議における不適切な用語の除外および類似の用語の統合により整理した。収集・整理した用語の使用の有無について、研究室パネル30人および消費者パネル800人を対象に、1996年12月～1997年1月に留め置き法により調査した。用語をランダムに並べ、○か×の二者択一形式で「食べるときに生じる感覚を表現するか」と質問した。データは頻度集計し、数量化理論第Ⅲ類により解析した。

【結果】収集された用語は、アンケートより153語、文献より187語であり、これらを整理したところ、“ぱりぱり” “つるつる” など53語となった。使用有無の消費者パネルの調査の回収率は約70%であった。研究室、消費者パネルとも、「食感覚を表現する」と答えたパネルの割合は、“さくさく” “ぱりぱり” “ほくほく” などが高く、食感覚との結びつきの強さが示された。一方、割合が低かったのは“かっか” “きしきし” などであった。また、“まったり” は10～30才代に特徴的であったが、用語のほとんどは消費者パネルの属性（年齢、性別、等）による回答パターンに差はなく、用語の認識に関する属性間の共通性が示された。